海外の話題

「松葉杖をつきながら思ったこと」

農林中央金庫　シンガポール支店長　栗原　晃

不覚にも出張中のシドニーの街中で転倒し、あろうことか骨折してしまった。

自分ではうまく足首をかばって倒れたつもりで、足の甲の痛みも捻挫ぐらいに考えていたが、その日の予定が終わるころには痛くて歩けなくなってしまった。何とかホテルに辿りつきフロントに相談したところ、「万一のこともあるから」という係員の勧めに従い、生まれて初めて救急車に乗せてもらうことになった。診察の結果は自分の予想に反し見事に骨折していて、ギプスを施された私は松葉杖をついて病院から戻り、翌日には機上の人となり本拠地シンガポールに帰国、その後会議で東京に行く機会もあり、オーストラリア、シンガポール、日本の三ヶ国で松葉杖を使うという、得がたい（？）体験をすることになった。

見るからに不自由な格好をしているので、行く先々でいろんな人が世話を焼いてくれる。それぞれの国柄によって反応がさまざまで面白かったが、一般に欧米人の方がこうした振る舞いを自然に（かつスマートに）こなすのは興味深い。ここで誤解して欲しくないのだが、欧米人もアジア人も親切な人は親切であり当然そうでない人もいるので、どちらが親切ということではない。ただし、同じくらい親切な欧米人とアジア人がいたら、きっと欧米人のほうが“格好よく”できるような印象を受ける。

浅学な私には本当の理由はわからないが、想像するに欧米人は普段から“演技”を心がけているのではないかと思う。年齢や性別にかかわらずニッコリ笑顔でドアを開けてくれたり、大げさに道を譲ってくれたりする振る舞いには演技の要素があり、不言実行の、シャイなアジア人には難しいのかもしれない。大げさに言えば文化の違いが反映されているような気もするのである。欧米人は日常的に大げさな身振りで感情を表現し、女房に対して“my honey”などと、歯の浮くような言葉を平気で口にする。レディー・ファーストなど特にそうで、あちらの紳士は結構自然に、かつあまりにもやりすぎるので、私などは立つ瀬がない。プレゼンテーションやら演説の類もどうもアジア系より欧米系のほうが得意なのも同じ理由によるのではないかと思ってしまう。

かつて、邦画の「Shall we ダンス？」がアメリカでリメイクされたが、リメイク版の主人公を演じたリチャード・ギアが一番苦労したのは「どうしたらダンスが下手にみえるかだった」というのを聞いて、オリジナルの主人公である役所広司氏はたぶんそういう苦労はせずにすんだのではない

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます

かと思い、苦笑してしまった。その映画の最初に「社交ダンスは欧州においてはひとつの教養であり…」という語りがある。

ともあれ、そうした親切を受ける身になってみれば、どんな形であれ有り難い。スマートな親切も心地よいが、ちょっと不器用な感じだけれど気を使ってもらっていることがわかるのは、かえって身に染みる思いだ。東京で電車に乗ったときも、きれいな身なりのサラリーマンやＯＬ諸氏より、着古したジーンズの、ちょっとフリーターっぽい若者のほうがさっと席を譲ってくれたりして、人は見かけによらないものだと痛感し、そんなときには演技はできないながらも、意識してはっきりお礼を言うように心がけた。それにしても転んだだけなのに骨折とは！日頃の運動不足を反省した次第である。

金融市場1月号　ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます　農林中金総合研究所